

# デジタル歴史教科書『mBook』の 教授学的特徴について

中園 有希

## 1. はじめに

本論文は、近年ドイツで開発され高い評価を受けている特徴的なデジタル歴史教科書『mBook』<sup>1)</sup>について、その教授学的特徴を記述し、課題と可能性を検討したものである。

『mBook』は、2011年にドイツの私立の研究所、デジタル学習研究所 (Institut für digitales Lernen) によって開発が始まり、2013年の9月以降、ベルギーとドイツの一部の学校で実際に使用されているデジタル歴史教科書である。ドイツにおける教科書としての認可は、その手続きの煩雑さから申請の準備段階にあり、まだどの州でも行われていない状況であるが、15年には「最も美しいドイツ語の電子書籍」<sup>2)</sup>に与えられる「ドイツ電子書籍大賞」を、翌16年には、革新性を持った教科書に与えられる「今年の教科書 (Schulbuch des Jahres)」賞の特別賞を受賞するなど、国内での認知は進んでいる。

ドイツでは、主として2012年以降、様々な形態のデジタル教科書の提供が広がっている。連邦16州の教育政策の調整機関としての機能を果たしている各州文部大臣会議 (KMK) が2012年に発表した決定、「学校におけるメディア教育」<sup>3)</sup>も、各州の教育政策におけるデジタル化の比重の

拡大を後押ししている。

デジタル歴史教科書『mBook』の特徴は、そのコンセプトや内容が、現在ドイツで提供されているどのデジタル教科書とも、どの歴史教科書とも異なっているところにある。他のデジタル教科書と比較するならば、この教科書は「革新的なマルチメディア教科書」と自負する一方で、デジタル性の追求については慎重かつ抑制的で、紙ベースの教科書を非常に強く意識している。また、他の歴史教科書と比較するならば、それはいわゆる「PISA ショック」以降に議論と研究が増加しているコンピテンシーを志向した教科書であり、現在ドイツ語圏の歴史科カリキュラムに大きな影響を持つコンピテンシーモデルを創出した「FUER (Förderung und Entwicklung von reflektiertem und (selbst-) reflexivem Geschichtsbewusstsein ; 熟考され (自己) 再帰的な歴史意識の育成と展開)」プロジェクトグループの代表者の一人が、その開発に携わっている。『mBook』は、デジタル性を追求したデジタル教科書ではなく、そのデジタル性を通して、「PISA ショック」以降の歴史科の学びが取り組んできた課題に応答しようとしたデジタル教科書なのである。

## 2. 『mBook』開発の経緯と学校における使用の現状

それでは、デジタル歴史教科書『mBook』は、どのような経緯で開発され、現在どのような学校において使用が始まっているのだろうか。

『mBook』を開発したのはドイツ南部のバイエルン州にある私立の研究所、デジタル学習研究所である。この研究所は、ドイツ唯一のカトリック系大学、カトリック大学アイヒシュテット-インゴルシュタット (Katholische Universität Eichstätt-Ingolstadt) の歴史理論・教授学講座 (Professur für Theorie und Didaktik der Geschichte) が、『mBook』を開発するために2011年に設立したスピンオフであり、したがって同大と密接な関係にある。すなわち、同研究所の主要メンバーであるシュライ

バー（Waltraud Schreiber）、ゾハッツィ（Florian Sochatzy）、フェンツケ（Marcus Ventzke）はいずれも同大の関係者である。

まず、シュライバーは、カトリック大学アイヒシュテットーインゴルシュタット、歴史理論・教授学講座の教授である。彼女は上でも触れた「FUER」プロジェクトグループの中心的メンバーであり、『mBook』開発のきっかけとなるプロジェクトにおける責任者でもあった。『mBook』の基盤をなす哲学は「FUER」プロジェクトグループのそれに多くを負っている。

研究所長のゾハッツィ、『mBook』の主要著者フェンツケは、ともに、元々はカトリック大学アイヒシュテットーインゴルシュタットで教鞭をとっており、同教科書開発のきっかけとなるプロジェクトにシュライバーとともに参加していた。プロジェクトの過程でデジタル教科書の開発を思いついたのは彼ら二人であり、ゾハッツィは、デジタル学習研究所を設立し、そちらに移籍すると大学での職を辞した<sup>4)</sup>。

『mBook』開発の契機となったのは、2010年にシュライバーらがベルギーのドイツ語共同体政府から委託された、9～12学年用の新しいカリキュラムの開発プロジェクトであった。シュライバー、ゾハッツィ、フェンツケは、ベルギーの教師4名およびドイツ語共同体文部省関係者1名とともに、コンピテンシーを志向した新しいカリキュラムを開発するよう要請されたのである<sup>5)</sup>。このカリキュラムの開発は、「コンピテンシー志向、科学技術の進歩と体系的な教師継続教育が、概念的に制御されつつ組み合わされるような、ドイツ語共同体の学校制度の包括的なイノベーション過程の一部」<sup>6)</sup>だったという。

この新しいカリキュラムの実施を保証するものとしてゾハッツィとフェンツケが構想したのが、新しいデジタル歴史教科書の開発であった。彼らは、歴史教授学者、文筆家、プログラマー、グラフィック・デザイナーなど多様な職種の専門家に開発への従事を要請し、20名のチームで作業を進めたという<sup>7)</sup>。

こうして開発された4巻構成のベルギー・ドイツ語共同体版『mBook』は、2013年9月から、同地域の全ての9～12年生が使用する歴史教科書として使用が始まった。導入にあたり、ベルギー・ドイツ語共同体政府は、1人1台のタブレットPCを学校に整備し、学習プラットフォームを通してデジタル教科書にアクセスできるような環境を整えたという<sup>8)</sup>。

実はベルギー・ドイツ語共同体には、この『mBook』導入まで独自の歴史教科書がなく、ドイツ語で書かれた他国の歴史教科書を用いて歴史の授業を行っている状況だった。人口7万6000人余りの小さな地域のために独自の歴史教科書を発行する出版社がいなかったためである。ベルギー・ドイツ語共同体版『mBook』は、同地域にとって初めての歴史教科書であり、その点でも大きな意味を持つものであった。また、この『mBook』は2016年の「今年の教科書」賞・特別賞を受賞し、受賞理由において「古典的な教科書とデジタル世界の間に橋を渡した」<sup>9)</sup>と評された

さて、ベルギー・ドイツ語共同体版『mBook』開発と並行する形で進めたのが、ドイツ西部に位置するノルトライン＝ヴェストファーレン州のための『mBook』開発である。ルール地方を有し、経済的にも豊かなノルトライン＝ヴェストファーレン州は、「PISA ショック」以降の議論を受け各州文部大臣会議が発表した、教育の質保証基準「教育スタンダード」を受け、いち早くそれに対応した新しいカリキュラム、「コアカリキュラム（Kernlehrplan）」を導入した。コアカリキュラムとは、それまでのカリキュラムとは異なり、生徒がその教科を通して獲得するコンピテンシーについての記述と、その最低限の基準についての記述しか行われていないカリキュラムである<sup>10)</sup>。各学校における裁量の余地を拡大し、時間割や重点項目、教育活動の範囲などについて、各校は自由に定めることができる。このカリキュラムは2004年、まずドイツ語、英語、算数／数学、第一外国語への導入から始まり、2008年からは歴史にも導入されることになったのである。

しかしながら、いわゆる「コンピテンシー志向」のこのカリキュラムの実施は容易ではなかった。旧来の授業形態の影響は大きく、パラダイムの転換には困難が生じていたという<sup>11)</sup>。

そこでノルトライン＝ヴェストファーレン州政府が着目したのが、デジタル教科書の導入である。それは、学校開発や授業開発においてデジタルメディアを積極的に活用する州政府の政策とも合致するものであった。同州のメディア審議会（Medienberatung）は、「メディアを用いた学校・授業開発について、学校や学校の管理職、教師継続教育を支援する」<sup>12)</sup> 役割を担っていたが、中等教育段階Ⅰの歴史と生物について、他の研究機関と協働して新しいデジタル教科書の開発に乗り出したのである<sup>13)</sup>。

こうして2013年にデジタル学習研究所に委託されたのが、ノルトライン＝ヴェストファーレン州版『mBook』の開発である。同州のための『mBook』は、中等教育段階をすべて網羅する教科書として構想されたベルギー版とは異なり、対象は中等段階Ⅰであり、全3巻構成であった。2014年からは、40余りのギムナジウムがパイロットスクールに選定され、この教科書を用いて歴史の授業を実施している。

ベルギーの事例とノルトライン＝ヴェストファーレン州の事例とを比較したとき、『mBook』の導入の際の条件は様々な点で異なっていたという。ノルトライン＝ヴェストファーレン州は、ドイツで最も多い人口を擁する州であり、生徒に対する1人1台のタブレットPC導入は、コスト面で困難であることがわかっていた。また、教師の人数もベルギーの比ではなく、『mBook』の使用についての対面での現職教育も実施は難しかった<sup>14)</sup>。このため、デジタル学習研究所は、教師用のデジタルハンドブック『mBook-L』も併せて開発し、この教科書のコンセプトや使用方法、授業展開のアドバイスなどについてビデオ等も活用しながら提示することで、教授活動の支援の実施を試みている。

なお、ノルトライン＝ヴェストファーレン版『mBook』は、2015年、「最も美しいドイツ語の電子書籍」<sup>15)</sup> に与えられる「ドイツ電子書籍大賞」

デジタル歴史教科書『mBook』の教授学的特徴について（中園）

を受賞している。また、ベルギー・ドイツ語共同体、ノルトライン＝ヴェストファーレン州双方において、『mBook』の利用データの分析や、生徒を対象としたテストによりコンピテンシーの変化を検討する4～5年間の縦断的研究が実施されている<sup>16)</sup>。この研究は、ドイツ国内の他の研究機関や大学との連携において行われている。

### 3. 他の歴史教科書との比較

それでは、『mBook』はどのような内容と構成を持ち、どのような点で特徴的なのだろうか。ここでは、2016年8月からデジタル学習研究所が一般利用者向けに公開を始めたバージョン<sup>17)</sup>をもとに、検討を行ってみたい。

一般利用者版『mBook』は全4部で、本文にあたる42章（「古代」1～7章、「中世」8～17章、「近世」18～24章、「近代」25～42章）のほか、「mBook 歴史・スタートページ」、「メソッドの章」、「索引、授業／メソッドの箱」、「ヘルプページ」から構成されている。メソッドの章では、視覚資料や文字史料、映画や展覧会、硬貨・紙幣やWikipediaなど10点について、歴史学的な取り組み方の方法論を、細かいステップに分けて提示している。この章は、本文中の課題に取り組む際に、しばしばハイパーリンクも含む参照が指示される章である。「索引、授業／メソッドの箱」では、重要語の索引のほか、本文中に枠囲みで登場した重要事項が再掲されている。ヘルプページでは、開発に携わった技術者たちの自己紹介動画を見たり、場合によっては窓口担当者にメールでコンタクトをとったりすることも可能である。

一般利用者版『mBook』の著者は8名で、共著も含め、最も多くの章を執筆しているのがフェンツケ（Marcus Ventzke）である<sup>18)</sup>。彼は、古代から現代にいたるまで幅広く15章を執筆しているほか、教師に向けたページの多くは彼の手になるものであり、この教科書の内容や構成に大き

く寄与していることが分かる。次に多くの章を担当しているのがクネーザー（Lukas Kneser）で、中世史を中心に、共著も含め全14章を執筆している。

さて、『mBook』を一見して気づくのは、その構成が意外なほどに、いわゆるスタンダードな紙ベースの歴史教科書に似ているということである。外部との通信機能やSNS機能の提供など、わかりやすいマルチメディアの機能はついておらず、動画や音声資料の存在、ワンクリックで呼び出すことができる目次機能やログインすると表示される学習履歴一覧などが、そのデジタル性を感じさせるくらいである。これが示しているのは、一方では、『mBook』の開発者の目標が、デジタル性の最大限の追求とは別のところにあるということであり、他方では、この教科書がドイツにおいて1970年代以降培われてきた教科書開発の伝統の上に登場したものだということである。

紙ベースの教科書との親近性は、実は『mBook』の開発者たちにも明確に意識されている。彼らは、『mBook』の構成について詳述した論文の中で、「マルチメディア教科書もまた教科書」<sup>19)</sup>だと述べている。ここで彼らが言う「教科書」とは、「学びと作業の素材であり、目的をもって史料によって拡張される叙述テキストの上に自覚的に構成されており、作業指示とメソッドの章が存在する」<sup>20)</sup>ものである。すなわち、現在のドイツのスタンダードな歴史教科書と、その基本的な機能や構成は変わらないということなのである。そこにおいて、「デジタルの拡張性の可能性は、課題設定や方法論、叙述の意図や生徒への接近に関してそれが付加価値をもたらすような場所にのみ使われて」<sup>21)</sup>いる。これは、「ロスト・イン・ハイペース」といった状況に陥らないためにも重要である。『mBook』はあくまで、「本を超えた”能力を持った本”<sup>22)</sup>なのである。

彼らは、『mBook』は決して「自動授業マシン（Unterrichtsautomat）」<sup>23)</sup>ではないと強調する。授業の構成において教師側の「主権（Souveränität）」<sup>24)</sup>を維持し、教科書はあくまで教師の教授活動と生徒の学びを支援する役割

デジタル歴史教科書『mBook』の教授学的特徴について（中園）

に徹するというスタンスも、従来のドイツの紙ベースの教科書と同じである。

『mBook』の構成や機能の特徴は、ドイツで広く使われている歴史教科書の一つ『歴史と出来事（Geschichte und Geschehen）』<sup>25)</sup>（全3巻）と比較すると、よりよく見えてくる。表1は、両教科書について、ドイツ近現代史の中でも重要なトピックである「第一次世界大戦」、「ヴァイマル共和国」、「第二次世界大戦」を扱った章を取り上げ、そこにおいて登場する課題や作業指示、史資料の数を比較したものである。

表1. 『歴史と出来事』と『mBook』における教授学的要素の数の比較（個）

		課題や作業指示	文字史料	写真・絵画	図表・グラフ	地図	音声資料	ビデオ・映画
第一次世界	『歴史と出来事』第2巻、第9章	34	12	9	1	2	0	0
	『mBook』第34章	107	84	144	22	17	5	13
ヴァイマル共和国	『歴史と出来事』第3巻、第3章	84	22	47	9	2	0	0
	『mBook』第36章	136	38	39	11	2	1	9
第二次世界大戦	『歴史と出来事』第3巻、第4章	133	49	70	5	4	0	0
	『mBook』第37章	132	92	191	5	4	1	12

両者を比較してわかるのは、紙ベースの『歴史と出来事』と比較して、デジタル歴史教科書の『mBook』は、より多くの教授学的要素を含んでいるということである。音声資料やビデオ・映画の活用は、そのデジタル性ゆえに実現できた特徴である。ただ、構成要素別の数を単純に比較すると、章によって両教科書の差があまり見られないものもある。とりわけ、『mBook』がその数において常に優位なのは文字史料の要素だという事実は興味深い。このことは、『mBook』が視聴覚要素に偏った教科書ではなく、古典的な教科書と同様、章ごとにその教授法に適した史資料を選定して構成された教科書だということを示している。

次に『mBook』の本文を見て気づくのは、叙述や課題・作業指示の中に、教科書著者の一人称としての「私（Ich）」という語が頻出することで

ある。例えば、第一次世界大戦を扱った第34章1節「平和の陰に戦争が隠れている？」の冒頭において、著者フェンツケは「私」という言葉を用いて以下のように語る。

「(前略) しかしながら私は、ある社会全体がどのようにして急に戦争状態になるのだろうかと自問するのです。そのためには、事前にたくさんのごことが起きる必要があるはずですよ：人間が戦争に参加するには準備ができていないはずがあります。そして、どれくらい早く軍隊を装備し行進を始めさせられるのでしょうか？」

以下の章で、私は第一次世界大戦のいくつかの背景を追求していくことになります。というのは、私は、戦争というものは、常に平和な時すでに始まっているのだと考えるからです。私はどういう意味でこう言っているのでしょうか？以下の章を読み、戦争勃発の背景を見つけてみてください。』<sup>26)</sup>

フェンツケの一人称は、第34章2節「戦争は自然に発生するのか、それとも人間によって引き起こされるのか？」にもみられる。この節の9つ目の課題であるが、

「私は“戦争が不可避だったことはない”と主張しました。第一次世界大戦の理由として挙げられた理由について判断と評価を行ってください。』<sup>27)</sup>

と書かれているのである。

多くの国の教科書と同様、ドイツの教科書においても、通常著者は一人称で文章を書くことはない。著者の一人称の不在によって、教科書で提示される知識や情報が中立的で客観的であるように見せることが可能になるからである。著者に暗黙の立場や主張が存在するという事は、必ずしも明示されない。

しかしながら、上述のように、『mBook』では、読者は、著者が「私」という言葉を使って自身の立場や主張、意図を説明するのに度々遭遇することになる。そればかりか、各章の冒頭には、当該章の著者が実際に顔を

出して自身のスタンスや教授学的意図を語る「著者インタビュー（Autoreninterview）」という動画がある。そこで語られる著者の言葉は、顔と声に接しながら伝えられることで、文章よりも強いインパクトとメッセージ性を帯びることになるのである。

例えば、第34章「第一次世界大戦—近代の破局の始まり？」の冒頭には、同章の著者フェンツケの「著者インタビュー」が掲載されている。3分35秒の動画の中で、フェンツケは次のように述べる。

「私の名前はマルクス＝フェンツケ、この章『第一次世界大戦—近代の破局の始まり？』の責任者です。私にとってこの章の構成において特に重要だったのは、第一次世界大戦期の生活について非常に包括的なイメージを示すことでした。（中略）私たちは生徒に、たとえ平和なときであっても、自分たちの生きている社会の周囲の世界において、どのような兆候が戦争や紛争の始まりをもたらさうかを、常にとても正確に観察しなくてはならないというメッセージを渡したいと考えました。戦争は空から降ってくるのではなく、形式的には平和な社会の後ろに隠れているのです。（後略）」<sup>28)</sup>

実は、教科書としては奇妙に思える著者の頻繁な登場は、この教科書が依拠している歴史教授学の理論に由来している。『mBook』の開発者の一人、シュライバーは、2000年から始まった歴史教授学の大規模研究プロジェクト、「FUER」プロジェクトの責任者の一人でもある。「歴史を考えよう、暗記するのではなく（Geschichte denken, statt pauken）」をモットーにしたこのプロジェクトは、2006年に『歴史学的思考のコンピテンシー—歴史教授学におけるコンピテンシー志向に対する寄与としての構造モデル』<sup>29)</sup>を出版し、歴史に関わる独自のコンピテンシー理論を発表した。

このコンピテンシーモデルは、「ナラティブ的な歴史理論」<sup>30)</sup>を基盤にしている。それは、「歴史学における歴史学的思考の原則と操作」が「生活世界的な歴史との関わり方の精巧な形態」<sup>31)</sup>であると考えられるものであり、また「生活世界と歴史学が分かちがたく結びついている体系的な関連

性」<sup>32)</sup>の中にあると考えるものである。

さらに、「FUER」プロジェクトグループは、「PISA ショック」以降のドイツのカリキュラムにおいて重視されるようになった「アウトプット志向」を、この理論と関連づける。というのは、「アウトプット志向」が意味するところは、「生徒が自分の現在と将来の生活の中で実際に使用できるような」<sup>33)</sup>何かを学ぶことを保証するということだからである。

このプロジェクトグループの理論が特徴的なのは、歴史学的思考のモデルの中に「生活世界」の要素を明確に位置付けることによって、同時に、歴史教授学の中に「PISA ショック」以降のアウトプット志向やコンピテンシーの重視を導入している点にある。そして、恐らくそれゆえに、そこで提示されたモデルは、ドイツ語圏の多くの歴史のカリキュラムに影響を与えた。上述のベルギー・ドイツ語共同体やノルトライン＝ヴェストファーレン州の歴史のカリキュラムは、いずれも「FUER」プロジェクトグループのコンピテンシーモデルに依拠している。また、2017年からバイエルン州で実施される新しいカリキュラム「Lehrplan Plus」<sup>34)</sup>も、やはりこのモデルを使用しているという。

『mBook』は、「FUER」プロジェクトグループの歴史コンピテンシーモデル理論を、その構成における哲学としたデジタル歴史教科書である。そこにおいて、デジタル性は、まず歴史の「著者性」を、より明確にわかりやすく学び手に伝えるために活用される。著者が普段着で登場し、自身の歴史観や執筆の意図を説明する「著者インタビュー」は、その代表的な例である。学び手は、ある歴史的な出来事についての歴史叙述が決して客観的・中立的なものではなく、時に時代や立場によって変わるものなのだとすることを繰り返し学ぶことになる。『mBook』は、ドイツの歴史教授学が1980年代から追求してきた「多元的視座 (Multiperspektivität)」の原則を、独自の形で取り入れたデジタル教科書である。そして、例えば「今年の教科書」賞では、その点が極めて高く評価されているのである。

「FUER」プロジェクトグループのモデルに関連して、現代とのつながり

りを意識した課題・作業指示の多さも、『mBook』の特徴である。例えば、第34章2節6項「戦争には理由が必要だ、現代でもこれは同じ？」では、第一次世界大戦の開始理由と対比させるような形で、イラク戦争を取り上げている。史資料としては、イラク戦争の写真やジョージ・ブッシュ大統領、パウエル国務長官の演説、当時のドイツ国連大使プロイガーの証言ビデオがあり、学び手には、第一次世界大戦とイラク戦争の開戦理由とその目的について、表を作成して比較することが課される。

また、第二次世界大戦を扱う第37章中の8節5項「現代における逃避と追放」では、第二次世界大戦後のいわゆるドイツ人「追放（Vertreibung）」と対比させて、現代のシリア難民を取り上げている。史資料はシリア難民の写真とボスニア戦争の難民の写真、計2枚であり、学び手は、シリア、アフガニスタン、イラク等における現代の紛争について調べ、難民が発生している理由について説明したり、人権保護を理由に他国に侵攻することの可否や、第二次世界大戦と現代の紛争における状況の相似性について議論したりすることを求められている。

#### 4. 『mBook』の課題

『mBook』は、ドイツ語圏で広がりを見せている新しい歴史コンピテンシーモデルに依拠したデジタル歴史教科書であり、それが紙ベースの教科書を意識しているために一層、媒体を問わず今後のドイツの歴史教科書のあり方に、何らかの影響を与えられると思われる。その一方で、今後『mBook』が直面したり、取り組んでいく必要がある課題もいくつか存在している。

最初の課題は、『mBook』の普及に関わるものである。ドイツは、他のヨーロッパ諸国に比べてもデジタル教科書の導入が遅れているといわれる。その原因としてしばしば指摘されるのが、ドイツの教師の間に根強く存在するICT技術やデジタル教材への不信感と抵抗感である。ボス

(Wilfried Bos)によると、2013年のICILS（IEA 国際コンピュータ・情報リテラシー調査）では、調査の対象となったドイツの教師の実に4分の3が、生徒がよく考えずにインターネット上の内容をコピーしていると懸念している<sup>35)</sup>。この値は、他の参加国と比較にならないくらい高いものだったという。さらに、この調査によると、ドイツの3分の1の教師は、デジタルメディアを授業で用いる際に起こりうる運営上の問題を恐れており、ちょうど30%の教師は、デジタルメディアを授業で用いることにより、生徒の学びが散漫になるリスクがあると考えているという<sup>36)</sup>。

学校におけるICT利用環境の整備の遅れも指摘されている。上述のICILS2013では、ドイツの8年生が通う学校におけるPC台数と生徒数の比は1:11.5であり、EU平均とほぼ同値であった。また、タブレットPCを持っている学校は全体の6.5%で、EU平均の15.9%を大きく下回っている<sup>37)</sup>。

バイエルン州の歴史教師組合の代表を務めるデンニガー（David Denninger）も、『mBook』の内容は高く評価しつつも、現在の同州の学校におけるICT環境を考慮すると、その利用が急速に広がるとは考えにくいと指摘する<sup>38)</sup>。彼は、学校に携帯電話の持ち込み禁止規定があり、無線LANの普及が遅れている限りは、ウェブブラウザベースのデジタル教科書が広く使われるのは難しいと話す<sup>39)</sup>。

普及についての課題は、『mBook』の開発者たちにも意識されている。デジタル学習研究所が2016年8月から開始した「自分の教科書を希望しよう（Wünsch dir dein Schulbuch）」<sup>40)</sup>キャンペーンは、この課題に関わるものである。このキャンペーンは、本稿の第3節で分析した一般利用者版『mBook』の公開に合わせて実施されるものであり、1か月間に亘り、その改善に関わる意見や提案、要望を募っている。

キャンペーンを実施する理由として、開発チームが挙げるのは、『mBook』開発に関連して遂行された学術的研究の蓄積が進み、受賞など一定の評価も得ているにもかかわらず、「依然としてごく少数の学校しか

『mBook』を使用していない<sup>41)</sup>ということである。「私たちはみなさんがマルチメディア歴史教科書にいったい何を求めているのかを知りたいと思っています」とキャンペーンのページには書かれている。寄せられたアイデアはそれぞれ審査され、最も高い評価を得た5つが表彰されるという。

次の課題は、『mBook』が推進する学びの形に関わるものである。開発者たちは、このデジタル歴史教科書が最終的に目指す学びの形は、「インクルーシブな学び (inklusive Lernen)」だと述べている<sup>42)</sup>。ここでいうインクルージョンとは、特別なニーズを持った子どもたちの普通学級への統合だけを意味するのではない。すべての学び手と教え手が、自身や他者の強みと弱みに、「その状況依存性や構成性において気づき」<sup>43)</sup>、教科特定の・横断的な「コンピテンシーの発展と明示によって」<sup>44)</sup>支援され、それぞれが可能な範囲のレベルに到達できるような形で強みと弱みと付き合い、それぞれが持つコンピテンシーを「協同的で状況的な問題解決」<sup>45)</sup>に利用したり、「現実としての多様性 (Diversität) を挑戦と好機だにとらえ、多様性 (Vielfalt) の承認と構成的な差異の熟考 (Reflexion) が、その相対化の余地を与え、固有の社会参加の可能性を開く」<sup>46)</sup>と判断することを目的としたものだという。『mBook』が今後課題として探究するのは、「コンピテンシーを志向したインクルーシブな学びを、デジタルな教授・学習材によって支援する可能性」<sup>47)</sup>なのである。

他者とともに学ぶことは、1970年代以降のドイツの歴史教育が目指してきた大きな目標の一つであった。歴史教科書もまた、その構成を通してその支援を試みてきたといえる。しかしながら、とりわけ2001年の「PISA ショック」以降、英語圏の理論を受容する形でドイツの教育学、教授学に急速に広まった協同学習 (kooperatives Lernen) の理論は、ドイツにおける従来のグループ学習論に転換を迫っている。グループワークの質や、そこにおける個人の学びの保証、多様性の承認などが課題として検討されるようになり、個人の学びを確実に支えつつ、協同的で豊かな学

びを実現する方法について、様々な側面から探究が始まっているのである。

『mBook』が目指す「インクルーシブな学び」も、2001年以降のドイツの教育学と教授学の動向を確実に反映している。そこで目指されるのは、「多様な知覚的、感情的、社会的出発条件を持つ学び手が、歴史学的思考を習得できるよう支援する」ことであり、多様な史資料と教授学的アプローチにより個人の学びを徹底的に支援しつつ、それが決して孤独な学習に分解しないよう協同の契機を作り続けることである。『mBook』は、教科書のデジタル化により取り入れることが可能になったビデオや映画、音楽が、協同の学びの契機として機能する可能性を持つと考えている<sup>48)</sup>。

しかしながら、ドイツにおいて歴史科は、多くの子どもたちがすでに成績によって進学先を振り分けられた中等教育段階から始まる教科である。『mBook』が目指すような多様性を持った教室は少なく、またそのためか、本当の意味でのインクルージョンの学びを志向した歴史教科書は殆ど存在しないのが現状である。また、歴史科の深い学びを実現するためには、『mBook』が協同学習の契機を見出している視聴覚要素だけでなく、文字史料との徹底的な取り組みを促すことも不可欠である。これらの課題に対し、『mBook』がそのデジタル性を通して答えを見出すことができるのかは、まだ明らかではない。

**【謝辞】** 本研究は平成28年度計算機センター特別研究プロジェクトの助成を受け遂行されたものである。

## 注

- 1) „mBook Das digitale Schulbuch für Geschichte“ (<http://mbook.schule/index.php?id=2007>) (最終アクセス2016年9月23日)
- 2) „Deutscher Ebook Award. Die schönsten deutschsprachigen eBooks“ (<http://www.deutscher-ebook-award.de/>) (最終アクセス2016年9月23日)
- 3) „Medienbildung in der Schule“ (Beschluss der Kultusministerkonferenz von 8. März 2012) (<http://www.kmk.org/fileadmin/Dateien/>)

veroeffentlichungen\_beschluesse/2012/2012\_03\_08\_Medienbildung.pdf) (最終アクセス 2016 年 9 月 23 日)

- 4) Eisenberger, Korbinian / Günther, Anna: „Digitales Lehrbuch für alles. „ In: *Sueddeutsche Zeitung* am 7.September 2016 (<http://www.sueddeutsche.de/bayern/schule-digitales-lehrbuch-fuer-alles-1.3148892>) (最終アクセス 2016 年 9 月 23 日)
- 5) Schreiber, Waltraud / Sochatzy, Florian / Ventzke, Marcus: „Multimediales Geschichtsschulbuch“, In: *AGORA. Magazin der Katholischen Universität Eichstätt-Ingolstadt*. Jg.29, Ausgabe 1 2013, S. 30–31  
Schreiber, Waltraud / Sochatzy, Florian / Ventzke, Marcus: „Das Potential digitaler Lehr- und Lernmittel für den Paradigmwechsel Kompetenzorientierung“, In: Buchberger, Wolfgang / Kühberger, Christoph / Stuhlberger, Christoph (Hrsg.): *Nutzung digitaler Medien im Geschichtsunterricht*. Innsbruck 2015. S. 179–199
- 6) „Multimediales Geschichtsschulbuch“, S.30
- 7) a.a.O., S.31
- 8) „Das Potential digitaler Lehr- und Lernmittel“, S.180
- 9) „Aus der Begründung der Jury zum Preis „Schulbuch des Jahres2016““(<https://drive.google.com/file/d/0B7sy51oXHSYPUGVVzNzNEIRXzg/view>) (最終アクセス 2016 年 9 月 23 日)
- 10) „QUA-Lis NRW Lehrplannavigator S1 Einführung“ (<http://www.schulentwicklung.nrw.de/lehrplaene/lehrplannavigator-s-i/einfuehrung/einfuehrung.html>) (最終アクセス 2016 年 9 月 23 日)
- 11) „Das Potential digitaler Lehr- und Lernmittel“, S.180
- 12) „Bildungsportal des Landes Nordrhein-Westfalen. Medienberatung NRW“ (<http://www.medienberatung.schulministerium.nrw.de/Medienberatung/Startseite/>) (最終アクセス 2016 年 9 月 23 日)
- 13) ちなみに、もう一つのデジタル教科書である『BioBook NRW』は、連邦州が共同で設立したメディア研究所である学術と授業における映画と視覚資料研究所 (FWU Institut für Film und Bild in Wissenschaft und Unterricht) に委託して開発が進行している生物教科書で、5、6年生を対象としている、この教科書は、12のパイロットスクールで実験的に導入されており、良質なデジタル教育メディアに授与される2016年のdigital awardを受賞している。
- 14) „Das Potential digitaler Lehr- und Lernmittel“, S.180–181
- 15) „Deutscher Ebook Award. Die schönsten deutschsprachigen

- eBooks“ (<http://www.deutscher-ebook-award.de/>)（最終アクセス 2016 年 9 月 23 日）
- 16) Schreiber, Waltraud / Sochatzy, Florian / Ventzke, Marcus: “Zwischen Behauptung, Intention und Evidenz. Zur Notwendigkeit die Entwicklung von und die Arbeit mit elektronischen Schulbüchern empirisch zu begleiten.“, In: Schuhen, Michael / Frotzheim, Manuel (Hrsg.): Das elektronische Schulbuch. Fachdidaktische Anforderungen und Ideen treffen auf Lösungsvorschläge der Informatik. Münster: LIT 2014, S.71-98
- 17) 一般公開バージョンを利用するためのライセンスには 3 種類があるが、筆者はこのうち「授業ライセンス」でアクセスした。
- 18) ただし、2016 年 9 月 23 日現在、第 38 章は執筆中であるため、この章の担当者如何では著者の人数に変動がある可能性もある。
- 19) Schreiber, Waltraud / Sochatzy, Florian / Ventzke, Marcus: „Das multimediale Schulbuch – kompetenzorientiert, individualisierbar und konstruktionstransparent.“, In: Schreiber, Waltraud u.a. (Hrsg.): *Analyse von Schulbüchern als Grundlage empirischer Geschichtsdidaktik*. Stuttgart: Kohlhammer 2013, S.212-232
- 20) a.a.O.
- 21) a.a.O.
- 22) a.a.O.
- 23) a.a.O.
- 24) Institut für digitales Lernen: „Das mBook Geschichte für Nordrhein-Westfalen“ ([http://www.medienberatung.schulministerium.nrw.de/Medienberatung-NRW/Lernmittel/Dateien/mBook/Theoretische\\_und\\_didaktische\\_Hintergru%CC%88nde\\_mBook.pdf](http://www.medienberatung.schulministerium.nrw.de/Medienberatung-NRW/Lernmittel/Dateien/mBook/Theoretische_und_didaktische_Hintergru%CC%88nde_mBook.pdf))（最終アクセス 2016 年 9 月 23 日）
- 25) Sauer, Michael (Hrsg.): *Geschichte und Geschehen. Bd.2*. Stuttgart; Leipzig: Ernst Klett Verlag 2016 / Sauer, Michael (Hrsg.): *Geschichte und Geschehen. Bd.3*. Stuttgart; Leipzig: Ernst Klett Verlag 2009
- 26) „34.1 Im Frieden versteckt sich der Krieg?“ (<http://mbook.schule/index.php?id=65>)（最終アクセス 2016 年 9 月 23 日）
- 27) „34.2 Entsteht Krieg einfach so oder wird er von Menschen ausgelöst?“ (<http://mbook.schule/index.php?id=68>)（最終アクセス 2016 年 9 月 23 日）
- 28) Ventzke, Marcus: „Autoreninterview“ zum 34. Kapitel (<http://mbook.schule/index.php?id=1695>)（最終アクセス 2016 年 9 月 23 日）

- 29) Körber, Andreas / Schreiber, Waltraud / Schöner, Alexander: *Kompetenzen historischen Denkens. Ein Strukturmodell als Beitrag zur Kompetenzorientierung in der Geschichtsdidaktik*. Neuried: ars una 2007
- 30) Schreiber, Waltraud u.a.: „Historisches Denken. Ein Kompetenz-Strukturmodell (Basisbeitrag)“, In: Körber, Andreas / Schreiber, Waltraud / Schöner, Alexander: *Kompetenzen historischen Denkens. Ein Strukturmodell als Beitrag zur Kompetenzorientierung in der Geschichtsdidaktik*. Neuried: ars una 2007, S.17–53
- 31) a.a.O., S.19
- 32) a.a.O., S.19–20
- 33) a.a.O., S.19
- 34) “Lehrplan PLUS” (<https://www.lehrplanplus.bayern.de/>) (最終アクセス 2016年9月23日)
- 35) Bos, Wilfried u.a. (Hrsg.): *Schule digital – der Länderindikator 2015. Vertiefende Analysen zur schulischen Nutzung digitaler Medien im Bundesländervergleich*. Münster: Waxmann 2015 S.103
- 36) a.a.O.
- 37) Bos, Wilfried u.a. (Hrsg.): *ICILS 2013. Computer- und informationsbezogene Kompetenzen von Schülerinnen und Schüler in der 8. Jahrgangsstufe im internationalen Vergleich*. Münster; New York: Waxmann 2014
- 38) „Digitales Lehrbuch für alles.,“
- 39) a.a.O.
- 40) „Wünsch dir dein Schulbuch“ (<http://dein.mbook.schule/>) (最終アクセス 2016年9月23日)
- 41) a.a.O.
- 42) Schreiber, Waltraud / Sochatzy, Florian / Ventzke, Marcus: „Auf dem Weg zu digital-multimedialen Lehr- und Lernmitteln für kompetenzorientiertes inklusives Unterrichten und Lernen“, Vortrag am 25.06.2014 anlass. Symposium ”Kriterien für Lernmittel des Gemeinsamen Lernens”, Medienberatung NRW
- 43) a.a.O., S.1
- 44) a.a.O.
- 45) a.a.O.
- 46) a.a.O.
- 47) a.a.O., S.2

48) a.a.O., S.3-12